

創価大学におけるハイパーフォーマー指標開発の試み

Brief Report: Developing a Hi-Performer Index for Students at Soka University

関田 一彦* 嶋田 みのり** 望月 雅光***

Kazuhiko SEKITA Minori SHIMADA Masamitsu MOTIZUKI

森川 由美**** 田川 咲紀****

Yumi MORIKAWA Saki TAGAWA

抄 録

創価大学では 2014 年度採択の AP 事業の一環としてハイパーフォーマー指標の開発を行った。ハイパーフォーマーとは、成績だけでなく、様々な点で大学適応度が高く、優良な学生として大学側が認知している学生を指す。本指標は、学生自身で学生生活の適応レベルを認識するための道具として開発した。本指標を活用することで、模範的な学生と自己の違いを適切に認識し、今後の大学生活の目標を設定できることが期待できる。

開発方法は以下の通りである。(1) 各学部から推薦された模範的な学生 35 名に対しインタビュー調査を行い、ハイパーフォーマーの実態を調査した。そして彼らに共通して見られる成長・変化を 20 項目に整理し、指標を作成した。(2) 教育学部 2 年生 26 名にパイロットスタディを行った。回答結果に天井効果が見られたことから、回答方法を 5 件法から 6 件法に修正した。(3) 1 年生～4 年生 331 名を対象に本調査を行った。そして統計処理及びインタビュー調査により、修正版指標の信頼性及び妥当性を確認した。

本指標により、学生の成長の度合いを学内のハイパーフォーマーと対照することができる。これは、今後創価大学が提供するカリキュラムの効果を検討する上でも有益だと考えられる。

1. はじめに

大学が提供するカリキュラムの効果を検討する上で、ハイパーフォーマー（成績だけでなく、様々な点で大学適応度が高く、優良な学生として大学側が認知している学生：以下、HiPer と略す）の実態調査は有益である。HiPer は大学が提供する正規/準正規な教育的働きかけを糧として、自身の可能性を開き、周囲から認められる成果を出している。したがって、彼らの適応状態を他の一般学生のそれと比較分析することで、より多くの学生の生産性向上に向けたカリキュラム改善のヒントが得られると思われる。

* 創価大学 教育学部 関西国際大学教育総合研究所客員研究員

** 創価大学 学士課程教育機構

*** 創価大学 経営学部

**** 創価大学 教育・学習支援センター(特別センター員)

創価大学では 2014 年度の AP 事業採択に伴い、HiPer 実態調査を進め、ハイパフォーマー指標(尺度)の開発を試みている。本稿は、その試みの概要報告である。なお、ハイパフォーマー指標(Hi-Performer Index, 以下 HPI と略す)とは、多くの HiPer に共通してみられる成長・変化を尺度化し、そのスコアによって、一般の学生が HiPer と自身の適応レベルの違いを認識し、更に成長するための目標設定を助ける道具である。

2. 開発方法

2-1 HiPer インタビュー

調査協力者

2015 年 1 月、7 学部の学部長に対し、学部教育の成果(成績・資格取得・語学検定・表彰など)として模範的と思われる上級年次の学生を 5 名推薦するように依頼した。推薦が 5 名に満たない学部については、キャリアセンターから就職活動で成果を上げている学生を追加推薦してもらい、7 学部合計 35 名(各学部 5 名)の学生に調査協力をお願いした。

インタビュー実施概要

2015 年 2 月 27 日から 3 月 11 日の間で面談時間を調整し、一人あたり 30 分程度でインタビューを行った。インタビューに際しては、個人情報保護、調査協力の任意性などについて説明し、協力の同意を得てから聞き取りを実施し、了解のもとに IC レコーダーで会話を録音した。

インタビューは 4 つの大問を用意し、主副 2 名のインタビュアーによる半構造化インタビューを行った。大問は以下の通りである。なお、インタビュー結果のまとめは 2014 年度の AP 事業報告書に記載している(pp.19-22)。

- (1) 大学時代に頑張ってきたこと、後輩に語れることは何ですか？
- (2) 入学に際し学部を選んだ理由と、今までに授業で学んだこととは繋がりがありますか？
- (3) 学部で学ぶ上で留意したこと、大変だったことはありましたか？
- (4) 今、そしてこれから取り組みたいことはありますか？また、その理由は何ですか？

2-2 調査票試作

インタビュー結果の中から、「入学に際し学部を選んだ理由と、今までに授業で学んだことの繋がり」および「学部で学ぶ上で留意したこと、大変だったこと」に関する回答に注目し、35 名の HiPer に多く共通して見られる 20 の認識をリスト化し、尺度原案とした。

パイロットスタディとして、教育学部の 2 年生 26 名を対象に、各項目に当てはまる度合いを 5 件法(当てはまる、多少当てはまる、わからない、あまり当てはまらない、あてはまらない)で尋ねたが、天井効果が見られた。そこで、6 件法(とてもそう思う、そう思う、ややそう思う、あまり思わない、思わない、全く思わない)を用いた修正版を作成した(資料 1)。

2-3 修正版の試行と集計結果

2015 年 11 月の授業時に、共通科目「人間教育論 I」の履修者を対象に、調査票を配布・回収した。回

答者 331 名中、欠損値の多い者を除く 313 名（内、1 年生 191 名、2 年生 97 名、3 年生以上 25 名）を対象に集計・分析した（表 1）。

20 項目にわたる自身の成長に関する実感は、学年を追うごとに高まることが期待される。年々、様々な学習や経験を重ね、自身の能力の向上感が高まっていくとすると、1 年生より 2 年生、そして 3 年生と学年が上がるにつれて HPI 得点は上昇すると予想された。実際、1 年生より 2、3・4 年生の得点はすべての項目で高くなっている。

表 1 各項目の基礎集計

| | 項目 | 学年 | 平均値 | 標準偏差 | 中央値 |
|----------------|--|-------|-------|--------|-----|
| 1 | 自身の夢の実現に必要な基礎を深めることができた。 | 1 年 | 3.94 | 1.2437 | 4 |
| | | 2 年 | 4.11 | 1.0885 | 4 |
| | | 3・4 年 | 4.52 | 1.1225 | 5 |
| 2 | 入学前にはなかった知識や考え方を得て、目標が明確になってきている。 | 1 年 | 4.24 | 1.1782 | 4 |
| | | 2 年 | 4.57 | 1.0538 | 5 |
| | | 3・4 年 | 4.72 | 1.3392 | 5 |
| 3 | 大学での学習がアルバイトやボランティア先での関わりに生かしている。 | 1 年 | 3.53 | 1.2416 | 3.5 |
| | | 2 年 | 3.97 | 1.1035 | 4 |
| | | 3・4 年 | 4.40 | 1.3229 | 5 |
| 4 | 興味関心が深まったとともに、出来事の因果関係を考えることができるようになってきた。 | 1 年 | 4.13 | 1.0309 | 4 |
| | | 2 年 | 4.53 | .9692 | 5 |
| | | 3・4 年 | 4.76 | 1.0520 | 5 |
| 5 | 授業中の討論やグループ学習を通じて、自身のコミュニケーション能力が向上している。 | 1 年 | 4.25 | 1.1545 | 4 |
| | | 2 年 | 4.62 | .9403 | 5 |
| | | 3・4 年 | 4.36 | 1.3191 | 5 |
| 6 | 授業で学び、考えたことを文章で表す力や正しい表現方法が身についてきている。 | 1 年 | 4.16 | .9458 | 4 |
| | | 2 年 | 4.45 | .8900 | 4 |
| | | 3・4 年 | 4.36 | .9522 | 5 |
| 7 | 論理的にものを考える癖がついてきた。 | 1 年 | 3.92 | 1.0998 | 4 |
| | | 2 年 | 4.56 | .9786 | 4 |
| | | 3・4 年 | 4.48 | 1.1225 | 5 |
| 8 | グループ課題の分担やミーティングの集合時間など、決めたことをきちんと守る姿勢が身についた。 | 1 年 | 4.25 | 1.1549 | 4 |
| | | 2 年 | 4.50 | 1.0421 | 5 |
| | | 3・4 年 | 4.52 | 1.1225 | 5 |
| 9 | 要点を簡潔にまとめてディスカッションやプレゼンテーションできるようになった。 | 1 年 | 3.96 | 1.0505 | 4 |
| | | 2 年 | 4.44 | 1.0203 | 5 |
| | | 3・4 年 | 4.54 | 1.1025 | 4 |
| 10 | 計画性をもって物事に取り組む習慣が身についてきた。 | 1 年 | 3.92 | 1.1282 | 4 |
| | | 2 年 | 4.24 | 1.0285 | 4 |
| | | 3・4 年 | 4.08 | 1.1150 | 4 |
| 11 | 積極的に自分から行動を起こす意欲がましてきた。 | 1 年 | 4.29 | 1.1769 | 4 |
| | | 2 年 | 4.56 | 1.0203 | 5 |
| | | 3・4 年 | 4.56 | 1.1576 | 5 |
| 12 | 何のために学ぶかを意識して日常の課題に取り組むようになってきている。 | 1 年 | 4.04 | 1.1780 | 4 |
| | | 2 年 | 4.40 | 1.0573 | 4 |
| | | 3・4 年 | 4.52 | 1.1225 | 5 |
| 13 | 理論と実践とを常にリンクさせて考える姿勢が身についてきた。 | 1 年 | 3.71 | 1.0518 | 4 |
| | | 2 年 | 4.12 | .9602 | 4 |
| | | 3・4 年 | 4.20 | 1.1902 | 4 |
| 14 | 周囲に流されず、自分がすべきだと思うことに取り組む心の強さが身についてきた。 | 1 年 | 4.26 | 1.0771 | 4 |
| | | 2 年 | 4.59 | 1.0483 | 5 |
| | | 3・4 年 | 4.68 | 1.1446 | 5 |
| 15 | 世界の現状に目を向ける意識が高まってきた。 | 1 年 | 4.37 | 1.1972 | 4 |
| | | 2 年 | 4.63 | 1.0033 | 5 |
| | | 3・4 年 | 4.84 | 1.3748 | 5 |
| 16 | 多くの人の意見を参考に、独りよがりの勉強にならないよう、自分の勉強の姿勢に注意するようになった。 | 1 年 | 4.09 | 1.0349 | 4 |
| | | 2 年 | 4.34 | .9562 | 4 |
| | | 3・4 年 | 4.40 | 1.1180 | 5 |
| 17 | それぞれの科目の関連性を意識して学ぶようになった。 | 1 年 | 3.89 | 1.0430 | 4 |
| | | 2 年 | 4.38 | 1.1128 | 4 |
| | | 3・4 年 | 4.40 | 1.1547 | 5 |
| 18 | テストに出ない範囲でも、自分の興味や今後に生きると判断した箇所はしっかりと勉強するようになった。 | 1 年 | 3.76 | 1.1930 | 4 |
| | | 2 年 | 3.94 | 1.2717 | 4 |
| | | 3・4 年 | 3.96 | 1.1358 | 4 |
| 19 | 自分の目標達成に役立つ内容かどうかを判断基準に、優先順位をつけて授業に取り組むようになった。 | 1 年 | 4.26 | 1.1072 | 4 |
| | | 2 年 | 4.57 | 1.2030 | 5 |
| | | 3・4 年 | 4.68 | 1.1075 | 5 |
| 20 | 建学の精神を学部での学びに生かしている。 | 1 年 | 3.84 | 1.2588 | 4 |
| | | 2 年 | 4.09 | 1.2423 | 4 |
| | | 3・4 年 | 4.20 | 1.1547 | 4 |
| 20 項目の合計 (HPI) | | 1 年 | 80.53 | 13.681 | 81 |
| | | 2 年 | 87.47 | 13.202 | 87 |
| | | 3・4 年 | 89.00 | 14.969 | 92 |

表 2 に示すように項目間の関係は弱いもの（項目 3 と 8 の相関係数は.17）から中程度に強いもの（項目 1 と 2 の間の相関係数は.62）まで、すべて統計的に有意な水準で正の相関がみられた。また、20 項目を束ねた HPI の α 係数は.92 となり、尺度として十分な信頼性を示した。

表 2 項目間の相関関係

| 項目 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2 | .62 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3 | .33 | .37 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4 | .39 | .49 | .45 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5 | .36 | .39 | .37 | .51 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6 | .36 | .39 | .36 | .41 | .50 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7 | .24 | .37 | .19 | .44 | .30 | .55 | | | | | | | | | | | | | | |
| 8 | .29 | .29 | .17 | .31 | .39 | .44 | .38 | | | | | | | | | | | | | |
| 9 | .35 | .37 | .29 | .47 | .53 | .54 | .46 | .54 | | | | | | | | | | | | |
| 10 | .36 | .34 | .21 | .33 | .25 | .34 | .38 | .45 | .46 | | | | | | | | | | | |
| 11 | .38 | .47 | .39 | .44 | .35 | .31 | .30 | .40 | .40 | .50 | | | | | | | | | | |
| 12 | .36 | .40 | .38 | .48 | .35 | .32 | .30 | .29 | .41 | .48 | .55 | | | | | | | | | |
| 13 | .42 | .50 | .29 | .50 | .29 | .32 | .46 | .32 | .38 | .43 | .47 | .57 | | | | | | | | |
| 14 | .29 | .34 | .25 | .44 | .25 | .27 | .36 | .35 | .35 | .38 | .41 | .40 | .38 | | | | | | | |
| 15 | .24 | .35 | .35 | .39 | .26 | .29 | .31 | .32 | .38 | .27 | .44 | .47 | .34 | .40 | | | | | | |
| 16 | .26 | .42 | .39 | .39 | .21 | .32 | .32 | .32 | .40 | .35 | .45 | .46 | .42 | .50 | | | | | | |
| 17 | .24 | .31 | .29 | .43 | .21 | .30 | .29 | .33 | .39 | .39 | .41 | .39 | .38 | .34 | .30 | .44 | | | | |
| 18 | .33 | .31 | .25 | .41 | .25 | .33 | .30 | .32 | .38 | .32 | .34 | .47 | .44 | .28 | .30 | .31 | .45 | | | |
| 19 | .33 | .36 | .23 | .29 | .21 | .25 | .20 | .22 | .24 | .40 | .36 | .38 | .41 | .34 | .25 | .33 | .35 | .36 | | |
| 20 | .38 | .37 | .39 | .44 | .38 | .35 | .23 | .34 | .39 | .38 | .42 | .57 | .46 | .31 | .46 | .48 | .43 | .46 | .41 | |

小数点 3 位で四捨五入。n が 300 名以上あるので、すべて 5% 水準で有意。

2-4 信頼性・妥当性の確認

「人間教育論 I」で実施した調査参加者の中から得点の上位 25 名、下位 25 名を抽出し、調査実施からほぼ 1 ヶ月経った 12 月 16 日から 23 日の 7 日間で再調査に協力を依頼したところ、高低合わせて 15 名の協力者を得た。再調査では、同じ調査票に回答を求め、合わせて 20 分程度のインタビューを行った。なお、調査協力者には図書カードを謝礼として支給した。

2-4-1 再テスト法による信頼性確認

表 3 に再テストの結果をまとめた。11 月と 12 月の得点の差は最大 17 点、最少 2 点であった。高得点群、低得点群それぞれの群内に 2 度目の得点も入っており、高低を識別できることが示された。15 人の得点の差の平均は 5.9 であり、120 点満点に対して 5% 未満に収まっている。

具体的には、2 度目の調査では低得点の者は上方に、高得点の者は下方に数値が移っている。得点の高い者の得点が頭打ちになり、変化の範囲も数点に収まっていることから、HiPer レベルはかなり安定していると推察される。

表 3 再テストの結果

| 学生 | 11 月 | 12 月 | 差(絶対値) |
|----|------|------|--------|
| 1 | 109 | 107 | 2 |
| 2 | 108 | 105 | 3 |
| 3 | 110 | 112 | 2 |
| 4 | 108 | 104 | 4 |
| 5 | 107 | 102 | 5 |
| 6 | 111 | 108 | 3 |
| 7 | 112 | 105 | 7 |
| 8 | 104 | 109 | 5 |
| 9 | 109 | 106 | 3 |
| 10 | 113 | 111 | 2 |
| 11 | 42 | 56 | 14 |
| 12 | 44 | 53 | 9 |
| 13 | 64 | 81 | 17 |
| 14 | 64 | 73 | 9 |
| 15 | 50 | 56 | 6 |

2-4-2 インタビューによる妥当性確認

再調査協力者には個別に半構造化インタビューを行った。インタビューアーにはどちらの得点群に属する学生であるかを告げずに、聞き取りを行わせたところ、得点群の異なる学生からは明らかな違いを感じたと報告があった。それぞれの群の典型的な言葉を対比して示す（表4）。

表4 高得点群と低得点群の回答内容の比較

| 質問 | 高得点群 | 低得点群 |
|------------------|---|---|
| 大学生活に満足しているか | <ul style="list-style-type: none"> ・充実して、楽しい ・英語力向上、実践的な力が身に付いた ・人間関係深まる、先輩とのつながり、後輩との関わり、先輩のサポート ・多様な価値観を学べる、文化の違いがおもしろい、いろんな人の意見聞いて ・刺激的、がんばっているみんなを見てがんばれる ・社会に出ても役立つ ・好きなこと学べる、目標達成、やりたいことがたくさんできた | <ul style="list-style-type: none"> ・つまらない、嫌々やってる感じ ・余裕がない、課題に追われて忙しい ・成績が良くない ・人間関係広がらない、人間関係が難しい ・世界が狭かった、毎日同じ顔 ・思っていたのと違う、興味関心ずれ ・本当はもっと真剣にやりたい ・なんでこの大学にきたんだろう ・誘惑が増えて、勉強がおろそかになった ・後悔、もっと本とかも読んだらよかった ・メンタル、限界 |
| 学部の授業は楽しいか | <ul style="list-style-type: none"> ・元々興味があって、小さい頃から、好き、興味あることいっぱい ・必要なことを学ぶ ・雰囲気、絆が深まる ・好き、知識を得る楽しさ、素直に話せる ・授業の内容が自分の身近な生活に活かせる | <ul style="list-style-type: none"> ・楽しくなかった、やる気を出すのが難しい、おもしろくない ・なんでやってんのかかわからない、目的意識がない、見つかってない ・スタートで転んだ ・授業で学ぶ内容が自分の生活と繋がらない ・先生が厳しく緊張 |
| 勉強の仕方に自信はあるか | <ul style="list-style-type: none"> ・成績が上がってきた、自信 ・勉強方法を変えて模索、自分にあったものを探す、自分にあった、やり方変える ・効率よくなった ・友達と一緒にやる ・課題以外にもやる、読書 ・計画性を持ってできるように ・まだ探し中、スコアが達していない、追われていた、もっと頑張れる | <ul style="list-style-type: none"> ・ぎりぎり、時間がかかる、終わらない、結構きつい、余裕がない ・授業以外の活動に重きを置きすぎた ・家でほとんどしない、コツコツやるのが苦手、普段全然しない ・全然理解しきっていない、全然進まない、一個のところで躓く ・偏った仕方になっちゃってる ・計画してない |
| 選んだ理由と学んだこととはつなが | <ul style="list-style-type: none"> ・小学生の時からずっと小学校の教員になりたいと思っていた ・自分の夢全部につながってる | <ul style="list-style-type: none"> ・興味関心とずれてる、ギャップを感じる ・逆に広がった、夢はきまっていなかった、どこでも良いんじゃないかなって思うよう |

| | | |
|--------------|--|---|
| <p>っているか</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・途上国に携わりたい、自分にあつてる科目を選べた、自分に一番合ってる ・第一志望ではなかった、人とのかわり合いの大切さを学べた。友達と話す中で変わった、刺激をもらう、M先生に惚れた ・やりたいことは本当にできている ・絶対ここでよかった、自分は向いてた ・素晴らしい先輩たちや同期、先生ほんとに素晴らしい人ばかり | <p>になった</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来どう活かされるんだろう ・相変わらず夢とか明確でもない |
|--------------|--|---|

3. まとめ

一連の確認作業で HPI としての妥当性・信頼性は確認されたと考える。HPI の一応の完成を踏まえ、今後、次のような調査と活用を考えている。まず、本学では後期の終わりに PROG（注）を下敷きにした「就業力テスト」を全1年生対象に実施している。このスコアと HPI の関連を調べることで、大学生活を通じて自身の成長を確かなものにしていく学生（あるいは反対に成長の手応えをつかみにくい学生）には、PROG が測るコンピテンシーとの間に何か特徴的な関係があるのかどうか、明らかにしたい。

また、新たに各学部から調査協力者を募り、1年次から3年次の間で、成長/変化が大きい項目とそうでない項目を整理する。この際、学部間比較をすることで、学部ごとのカリキュラムの違いが HPI 得点に反映するのかどうかを点検する。

このように、適宜、学部の教育プログラムの効果点検を行うことができる HPI は、教学マネジメントの有益な道具として活用できると考える。

（注）PROG（Progress Report On Generic skills）とは、株式会社リアセックが学校法人河合塾と開発したプログラムで、専攻・専門に関わらず、大卒者として社会に求められる汎用的な能力・態度・志向（ジェネリックスキル）を測定・育成する。

参考文献

創価大学教育・学習支援センター（2015）「大学教育再生加速プログラム（AP） テーマ I・II 複合型」
創価大学学士課程教育機構

付記

ハイパフォーマー指標の開発は、2014 年度採択の AP 事業の一環として行われた。なお、結果の公表に関しては、創価大学が設置する「人を対象にした研究倫理委員会」の承認を得ている。また、インタビューに際して、2013 年度採択の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業により整備された実験施設を利用している。

資料 1. HPI マークシート

(表)

学生の皆さまへ調査協力をお願い

この調査は、現在、創価大学が進めている教育改革（AP 事業）の一助となるものです。5分ほどで記入できますので、思うとおりにご回答ください。結果が成績に影響することはありませんし、結果がこの調査以外の目的に使われることもありません。

調査協力は任意であり、強制されるものではありません。回答する・しないは自由ですし、途中でも回答を止めることができます。そうすることで何らの不利益を被ることもありませんので、気持ちを楽にしてご協力ください。

なお、回答者の中から数名を選び、後日少しお話しを伺わせていただくことがあるかもしれません。その場合の協力も任意ですので、安心してご回答ください。

本調査に関して不明な点があれば、AP 推進本部あてにメール（ap-ph@soka.ac.jp）にてお尋ね下さい。

★以上の注意事項をお読みになり、ご同意いただけの方は裏面のアンケートに お答え下さい。

創価大学 AP 推進本部

(裏)

ハイパーフォーマー指標

※鉛筆またはボールペンでマークしてください。
※機種で読み取りますので折り曲げたり、濡らしたり、汚したりしないでください。



学籍番号

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

男性 ① 女性 ②

氏名

科目名

担当教員名

記入日
月 日

入学当時(あるいは1年生のとき)のご自身と比べて、以下の項目について自己診断してみましょう。

| 項目 | とても得意 | 得意 | 少し得意 | あまり得意でない | 不得意 | 全く得意でない |
|---|-------|----|------|----------|-----|---------|
| 1 自身の夢の実現に必要な基礎を固めることができている。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 2 入学前にはなかった知識や考え方を得て、目標が明確になってきている。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 3 大学での学習がアルバイトやボランティア先など社会との関わりの中で生かしている。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 4 興味関心が深まったとともに、出来事の因果関係を考えることができるようになってきた。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 5 授業中の討論やグループ学習を通じて、自身のコミュニケーション能力は向上している。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 6 授業で学び、考えたことを文章で表す力や正しい表現方法が身についてきている。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 7 論理的にものを考える癖がついてきた。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 8 グループ課題の分担やミーティングの集合時間など、決めたことをきちんと守る姿勢が身についた。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 9 要点を簡潔にまとめてディスカッションやプレゼンテーションできるようになった。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 10 計画性をもって物事に取り組む習慣が身についてきた。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 11 積極的に自分から行動を起こす意欲が増してきた。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 12 何のために学ぶかを意識して日常の課題に取り組むようになっている。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 13 理論と実践とを常にリンクさせて考える姿勢が身についてきた。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 14 周囲に流されず、自分がすべきだと思うことに取り組む心の強さが身についてきた。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 15 世界の現状に目を向ける意識が高まってきた。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 16 多くの人の意見を参考に、独りよがりな勉強にならないよう、自分の勉強の姿勢に注意するようになった。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 17 それぞれの科目の関連性を意識して学ぶようになった。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 18 テストに出ない範囲でも、自分の興味や今後に生きると判断した箇所はしっかりと勉強するようになった。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 19 自分の目標達成に役立つ内容かどうかを判断基準に、優先順位をつけて大学生活をすごすようになった。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| 20 建学の精神を学部での学びに生かしている。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |

※これらの項目は、在学中に顕著な活動実績をあげた先輩たちに共通してみられる変化を整理したものです。ご自身の成長の目安にしてみてください。

Abstract

This paper reports about the development of Hi-Performer Index (HPI) at Soka University. Hi-Performers are university seniors who not only perform academically well but also adapt comfortably to other parts of university life such as co-curricular activities. HPI, indexing characteristics of Hi-Performers, enables students to recognize their achievement level to their own student-lives, so students can set new goals to achieve in the rest of their student-lives.

The procedure of developing HPI was as follows: 1) Interviewed 35 students who could be regarded as Hi-Performers by department chairs, and extracted 20 items from the interview data to make the index. 2) Conducted a pilot study with 26 students to assess the feasibility of the index, and modified scale of the index since a ceiling effect was observed in the result. 3) Conducted the main study with 331 students to verify reliability and validity of the index with the modified scale by both statistics and interview surveys.